

# 大西博士手記

文學部三十周年史編纂にあたり、文科大學時代からの關係の記録を蒐集するの時、はからず、



大西博士

大西祝氏の手記を見出した。これは文科大學設立に關する計畫學科擔任教授の豫定などの覺書である。狩野直喜博士、その他の方からも、木下總長と大西祝氏との間に議せられた制度・講座の案がある筈との談は、聞いてゐたのではあつた。

この草案は、よほど早い時代の作製と思はれるが、また以て文科大學創設のその前史を偲ぶ料ともと考へられるのでこゝに科日、講座に關するものゝ全文を記るし置く。

哲學科  
國文學科  
漢學科  
國史科

史學科  
博言學科  
英文學科  
獨逸文學科

佛蘭西文學科

哲學科

哲學概論

西洋哲學史

論理學及認識論

社會學

東洋哲學

佛語 英語 羅甸語  
獨語 希臘語

心理學

國文學科

國語學

國文學、國文學史

漢文學

倫理學

美學及美術史

教育學

宗教學

精神病學

法理學

法理哲學

國聲音學  
國史

漢學科

支那史  
支那法制史

國史學

國史及地理  
古文書學

史學科

史學及地理學  
古文書學  
年代學

博言學科

博言學 人類學  
羅 旬 語

支那語  
漢文學

法制史

經濟學  
財政學  
比較法制史

希臘語 ロマンス語及チユトニツク語

佛蘭語 比較文法

聲 音 學  
 支 那 語  
 獨 逸 語  
 梵 語  
 印度歐羅語比較文法  
 朝鮮語

○哲 學  
 教 育 學  
 宗 教 學  
 史 學  
 言 語 學  
 文 藝 學  
 美術史及美術論

滿洲語  
 和蘭語  
 露 語  
 伊太利語  
 アイヌ  
 マライ  
 西洋文學史

文 科 大 學  
 ○哲 學 科  
 ○史 學 科  
 ○語 學 科  
 ×師 範 學 校  
 ×美 術 學 校

哲學

哲學概論

西洋哲學史

印度哲學史

支那哲學史

論理學及知識論(認識論)

倫理學

史學

史學(歷史研究法)

古文書學

年代學

古代史

中世史

近世史

支那史及其他東亞史

法理哲學

美學

4 心理學(生理的心理學 精神病論)

5 宗教學

6 社會學

3 教育學

4 國史

5 美術史(考古學)西洋及東洋

法制史

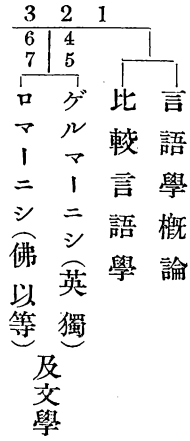
文學史 日本

支那

西洋

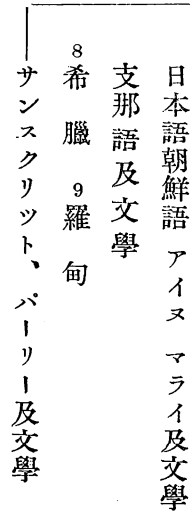
文明史

語學

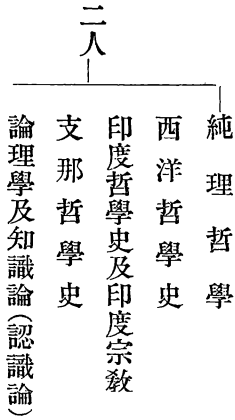


宗教教育學

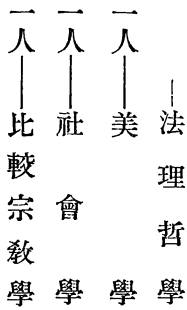
藝文學



哲學科



倫理學



講師 佛 教  
講師 基 督 教

史 學 科

二人 兼任 歷史研究法 古文書學 年代學

渡邊 箕作 世界史殊ニ西洋諸國歴史

古代 中世 近世

一人 支那史及其他東亞諸國ノ歴史

一人 國 史

講師 法 制 史

何人カ 兼 任 文 明 史

美術史及考古學

西洋及東洋(日本)

語 學 科

一人又 比較言語學

二人又 日本語、朝鮮語、滿洲語等

一人 教 育 學

一人 心理學 生理的心理學 (講師) 精神病論

文 學 史

一人 國 文 學 史

支那語兼任

一人 支那 文學 史 狩野

英吉利文學史

佛蘭西文學史

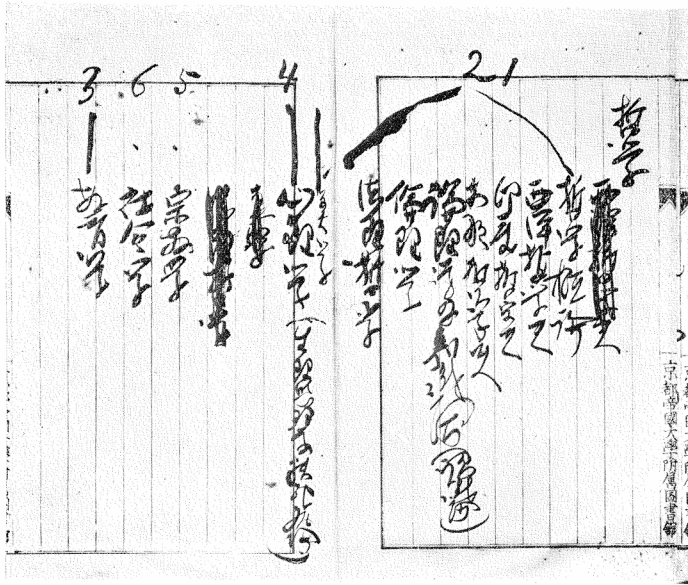
獨逸文學史

伊太利文學史

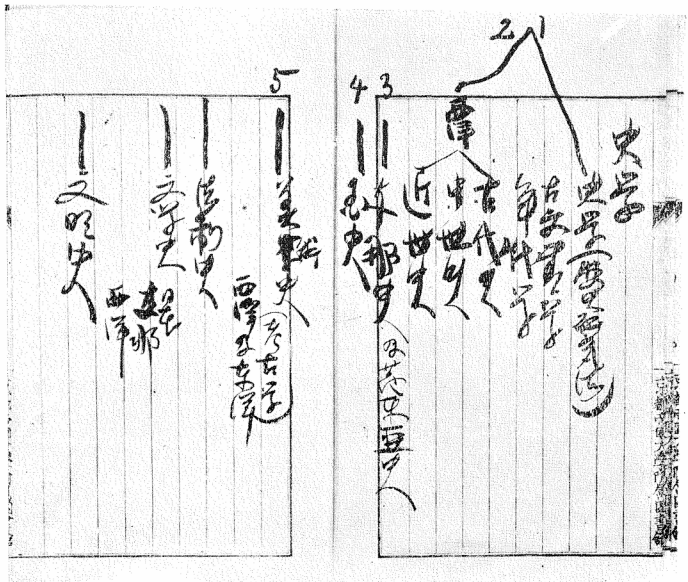
西洋人

ア イ ヌ 語

マライ語及其他南洋語

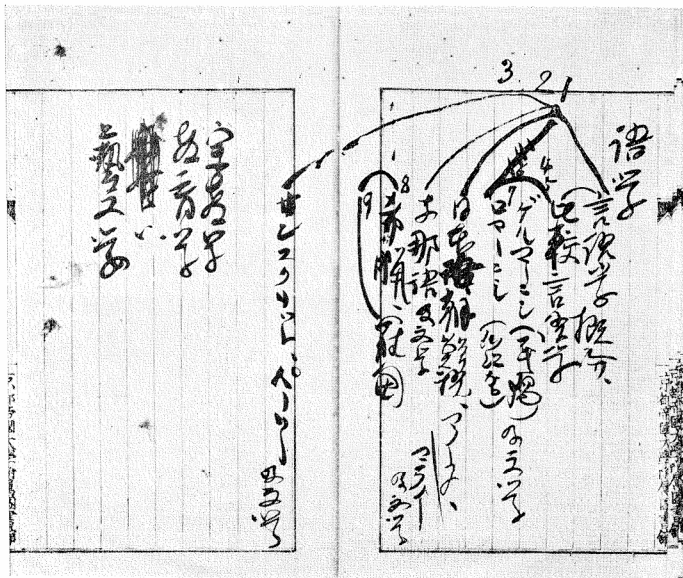


一 其 記 手 士 博 西 大

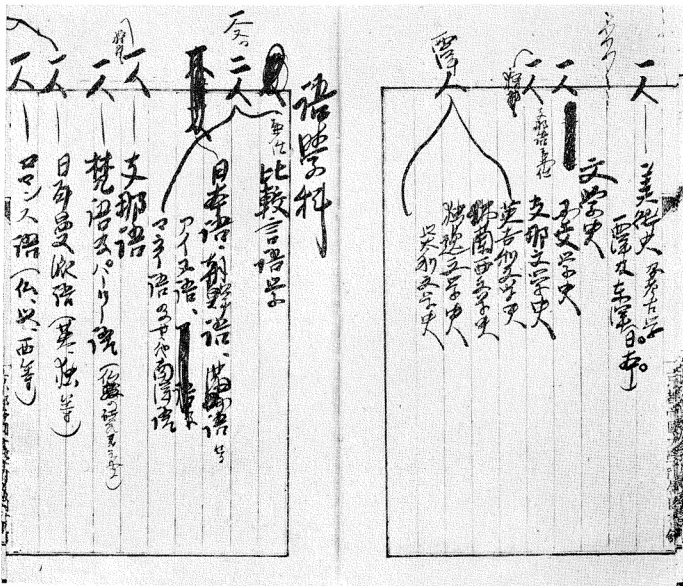


二 其 上 同





三 其 記 手 士 博 西 大



四 其 上 同

一人——支那語

狩野

一人——梵語及パーリー語

(佛敎の研究兼ぬ)

西 一人——日耳曼派語(英獨等)

一人——ロマンス語(佛伊西等)

一人——スラヴ語(露語等)

大西祝博士は、京都帝國大學に文科大學を開設すべき計畫の立てられた最初、明治三十一年二月、選ばれて文部省より、哲學研究のため獨逸國に留學を命ぜられ、また、翌三十二年六月には京都帝國大學より獨逸其他各國文科大學の學科及び組織の取調を囑託せられた。歸朝の後文科大學創立の事に與るためであり、その際には學長たるべく豫定せられてゐたのであつたが、不幸疾の冒すところとなり、三十二年九月歸朝、東京及び鎌倉に病を養ひ、癒ゆるに至つて、翌年三月より京都に居住し、理工科大學講師を囑託せられると共に、大學總長木下廣次氏の意をうけて、文科大學の組織計畫に與つてゐた。大學の一室を提供され、研究及び調査に従はれたが、同年十一月遂に逝去した。木下總長は、爲に文科大學の創立に一挫折を來したとの歎を發せられたこのことも言はれてゐる。

手記は、京都大學附屬圖書館の用紙、十一葉に書かれた草稿である。その起草の時を明らかにしないが、三十二年三月京都に來住し、同年十月郷里岡山に歸住するまでの間、木下總長をたずけて、文科大學創立の事を謀られた期間のものである。これは、もとより博士の一私案とも見ら

れるであらうが、しかし、京都大學に勤務中のことであり、木下總長との關係、大學の用紙等のことより推して、たゞ私案たるよりは、當局の間に考へられた、他日文科大學創立に際してその基礎となるものとすることもまた甚しく誤ることはないであらう。

手記の内容は本文の如くであるが、最初の頁には、哲學科・國文學科・漢學科・國史科・史學科・博言學科・英文學科・獨逸文學科・佛蘭西文學科の九學科目の名並記せられ、以下數葉に互つて、各學科に所屬すべき科目の名を記してゐるが、この事は、思ふに、現在の如く、哲・史・文三學科の區別をたてず、東京帝國大學文科大學と同様、各學科獨立した講座の設置を企圖したものであらう。然るに、それにつづく草案に於ては、哲學科・史學科・語學科の三大別が行はれて、現在見るときき方針が立てられてゐるのである。但しなほ今日のものとは異なる點は、史學科の中に各國文學史を、美術史と相並んで含ませ、それを以て各國文學の研究にあて、従つて今日あるとき文學科は見當らず、言語學及び各國語學を主とする語學科が考へられてゐたことである。このことは各國文學の研究も、その文學史を中心問題とする見地に由るものであり、それが後に改められて、文學の概念に抱攝せられるに至つて、史學科より獨立し、語學科と合して、文學科となつたものであらう。

此等の點に於いて、本手記の案は、必しも今日あるものとは一致しないが、文科大學創立前史の資料ともなるであらう。尙ほ本文の印刷は都合上、必ずしも草稿の體裁と一致して居らない。